

1 はじめに

わが国で小児への人工内耳（以下 CI）手術が開始されて約 20 年が経過し、当時施術した CI 装用者ら（以下、装用者）が進学や就職などのライフイベントを迎える時期に差し掛かっている。また、新生児聴覚スクリーニング検査の普及や、小児 CI 適応基準改定（2014）を受けて、1 歳時点での手術や、両耳装用を選択する家族が増加している。CI は重度聴覚障害者が音の世界に開かれる有力な手段の一つであり、発音明瞭で音への反応が鋭い装用者も多く、問題なく日常生活を送っていると捉えられがちであるが、条件によっては聞こえにくさを抱えて過ごしている。そのような中で青年期を迎え、自己認識という課題と向き合わざるを得なくなった装用者は、生活場面の各所で種々の困難を敏感に感じ取り悩むのではないか。そこで、この時期の装用者の意識を知ることを目的としてインタビューを行い、言語運用に関わる示唆を得たので報告する。

2 インタビューの方法とその後の分析

18 歳～25 歳の装用者 9 名に対して「人工内耳への思い」「聴覚障害への思い」に関するフリートーク（非構造化面接）を 90 分程度行い、幼児期・学齢期・学齢期以降を経て青年期に至る経時的変化やそのきっかけに関する内観データを得た。音声は文字に起こし、その発言内容を分析して 3 に示す表にまとめた。各項目には筆者がタイトルをつけ、下部に具体的な発言を記載した。

3 項目立てと考察

(1) 聞こえにくいことは小さい頃からわかっている	
・最初から／生まれたときから ・自然／わかった ・耳が聞こえない（悪い）／聞こえにくいのかな	
①聞こえないことがいやだと思う	②聞こえないことがいやだとは思わない
・他の人みたいに／普通に会話したい ・羨ましい・どうして自分だけ	・むしろ／逆に聴覚障害でよかった・自分の存在価値・デメリットばかりじゃない・どうすればいいのか考える方が重要

多くは、幼い頃から「自分は聴覚障害者である」という事実は認識していることが窺えた。しかし、聴者と同じように会話をしたいという思いの者もあり、聴覚障害という事実の認識とその受容とは本人にとっては別の問題であると思われた。一方、「聞こえないことがいやだとは思わない」者もいた。②であると話した者の多くが①の過程を辿っており、聴覚障害を受容しているように見える者も一旦は聞こえにくさから生じる困難と向き合い、葛藤しているものと考えられる。

(2) 口頭でのやり取りの増加で聴覚障害を改めて自覚
・おしゃべり／会話／コミュニケーション ・聞き取り・通用しない／きつくなってきた ・他の人は困ってない／全然違う・高学年くらいから

小学校高学年以降、口頭でのやり取りの増加をきっかけに「やっぱり自分は聴覚障害者なのだ」と自覚した。」と話す装用者がいた。身体的コミュニケーション以上に深いやり取りに十分に対応できない経験から、健聴の友人と自身の聞こえ方に差があることに気付き、それが聴覚障害の否定的な認識に繋がっていると考えられる。

(3) CI をしていて良かった・なくてはならないもの
・良かった（と思う）／（親に）ありがたい ・聞こえの具合が（補聴器とは）全然違う／良く聞こえてる／補聴器だけではダメ／不十分 ・コミュニケーションがスムーズ ・聞こえるのが当たり前 ・人工内耳なしは考えられない／音がないと不安／必須／相棒

一方、CI については「していて良かった／なくてはならないもの」と全員が述べている。重度聴覚